



古道が紡ぐ物語



西熊野街道（十津川街道）を行く②

（日本史に残る様々な出来事を紡ぐ）

西熊野街道（十津川街道）の最大の難所といえる天辻峠だが、大正 11 年、旧天辻隧道が貫通し、道路整備とともにトラックが峠を越えて入れるようになって以降、それまでの木材加工品にとどまらず、大量の材木の天辻越えが始まり、山村の経済は一気に発展することとなった。

太平洋戦争をはさみ昭和 30 年代に入ると、吉野熊野総合開発事業として、十津川流域には、上流から猿谷ダム、風屋ダム、二津野ダムが建設され、日本の戦後復興を電力面で支えたが、これらの建設資材運搬用に道路の近代化が進み、同時に木材等の物資や人の往来はさらに活発化した。

それとともに西熊野街道の一部はダム湖に姿を消すこととなり、その道筋も変化した。そして平成 16 年、奥吉野では紀伊山地の参詣道が世界遺産に登録された。しかし、神武東征から、壬申の乱、南北朝、明治維新の魁さきかけとなった天誅組等々、古代から日本史に残る様々な出来事を紡いできた西熊野街道は、それらの参詣道に比べても決して遜色は無いといえる。

西熊野街道に交わる高野大峯街道と小辺路

西熊野街道は分水嶺である天辻峠を南へ下り阪本（五條市大塔町阪本）に出ると、大峰山系に流れを発する「天の川」に出会う。この川は下流で「十津川」「熊野川」へと名を変え熊野灘に注ぐ。

そして道も、大峰山から高野山に至る「高野大峯街道」と出会う。この街道はしばらく合流した後川を渡り大塔町中原から野迫川村を経て高野山に至る。現在は奈良県道 53 号線として整備されている道である。一説ではすでに白鳳年間（7 世紀後半頃）には、大峰山の山岳修行者により通じていたといわれ、その後、高野山との往来が活発になるにつれ、街道の原型が形作られ、西熊野街道との結節点である阪本は、旅人や参詣客で賑わう宿場として栄えていた。

その後、西熊野街道の整備は十津川に沿って南下し十津川村川津まで延びるが、ここから南は険しい渓谷に阻まれて工事は立ち止まる。

古来の西熊野街道は、川津から十津川支流の神納川をさかのぼり、十津川村五百瀬いもぜから三浦峠を越える。つまり、高野山と熊野本宮を結ぶ小辺路こへちに合流する。そして、三浦峠の山越えから十津川温泉郷に下り、果無山脈はてなしを越えて本宮に至っていた。かつては、小辺路は参詣道であるとともに十

大塔町阪本は西熊野街道と高野大峯街道が交わり、宿場として賑わった。



かつての西熊野街道は世界遺産の道「小辺路」を通る。（十津川村果無）

津川の生活に密着した道でもあった。

国道 168 号線の原型

川津で止まっていた道路整備は、その後徐々にではあるが延伸し、途中に太平洋戦争をはさみながらも、昭和 25 年に十津川村小原（十津川村役場付近）までが開通、翌々年 27 年ようやく五條～十津川村平谷（十津川温泉付近）の間に車道が開通した。

しかし、平谷から南は果無山脈に阻まれ車道の建設は止まってしまい、ようやく進み出すのは吉野熊野総合開発事業が始まってからである。昭和



南朝第3代長慶天皇を祀る国王神社。地元では天皇のお首を葬ったと伝わるが謎が深い。



大塔宮護良親王の黒木御所跡。(十津川村谷瀬)

34年、平谷より約5km下流、十津川の左岸二津野の二津野ダムが建設されることになり、その資材搬入経路として未開通区間が建設され、ついに和歌山県側まで全通、今の国道168号線の原型が出来上がった。

そして現在、地方高規格道路としてこの街道は着々とさらなる近代化が進められている。

西熊野街道周辺に残る南朝と後南朝の足跡

西熊野街道周辺、また、東側の天川村、川上村周辺には、鎌倉時代末期から室町時代にかけての南北朝時代の後醍醐天皇方、つまり南朝（吉野朝）方の足跡が多くみられる。

南北朝の起源は、そもそも鎌倉時代半ばの1246年、後嵯峨天皇の退位後に皇位継承を巡って大覚寺統と持明院統が争った皇室の分裂に始まる。

この時、鎌倉幕府の仲介によって、大覚寺統と持明院統が交互に皇位につく「両統迭立」が取り決められ、以後200年に及ぶ皇室の分裂の端緒となったが、まだ南北に分かれたわけではない。

その約90年後、大覚寺統の後醍醐天皇は全国の武士に綱旨を発し鎌倉幕府打倒の旗を揚げ、大塔宮護良親王（読みには諸説ある）が熊野から奥吉野を巡りながら勢力の拡大を図った。そして、これに呼応した足利尊氏らの働きでついに鎌倉幕

府は滅び、1334年に「建武の新政」と呼ばれる後醍醐天皇の親政が成り皇統の統一が目指された。

しかし、天皇親政に対して、このころ成長していた武士勢力の不満は大きく、やがて足利尊氏が離脱し持明院統の光明天皇を京都に擁立（北朝）して室町幕府を開き、一方、後醍醐天皇は京都を脱出して奈良の吉野山へ逃れ南朝（吉野朝廷）を開いた。ここに南北朝が始まり、後醍醐天皇、その後の南朝三帝（後村上天皇—長慶天皇—後亀山天皇）と続くのである。

南北朝分裂後、両勢力の攻防は一進一退となるが、やがて、後醍醐天皇の崩御や南朝方有力武将の相次ぐ戦死により北朝方の勢力が圧倒的優位に立ち、吉野行宮が陥落、後村上天皇ら南朝一行は賀名生（五條市西吉野町）へ逃れ、以後、北朝方の圧迫の前に南朝三帝は奥吉野の各地を行宮と定め転々とする事となる。

この時代、鎌倉幕府打倒に働いた大塔宮護良親王は旧大塔村（現五條市大塔町）の殿野・辻堂を拠点とし、この地の豪族竹原八郎や戸野兵衛が忠誠を尽したことから、後に村名の由来となった。

そして、十津川村谷瀬に大塔宮の黒木御所跡が伝わる。この黒木御所とは、皮の付いたままの木材で建てた急造の御所という意味であり、幕府あるいは北朝勢力に対しながら、移動を繰り返した大塔宮や南朝三帝の営んだ黒木御所跡は、奥吉野各地に点在している。

1392年に、両統迭立を条件に皇室はようやく合一するが、時は室町幕府が最も充実した三代將軍足利義満の時代であり、両統迭立の約束が守られることはなく持明院統の皇統が続いた。

そのため、南朝の遺臣たちにより皇位回復を目指した反抗が続き、これが「後南朝」と呼ばれるものであるが、1457年、南朝後裔の自天王・忠義王兄弟が幕府方の手にかかり、南北朝時代もついに終焉を迎えた。

この「後南朝」の悲話は、奥吉野でも東部の川上村、上北山村に多く残る。（終）（山城 満）